07.鎌田（かまた）　武一（たけいち）さん

かまた木炭
木炭生産業

〒059-1622
厚真町字宇隆352
年　　齢　３９歳
勤続年数　１６年

就業のきっかけ

出身は青森県青森市で、札幌市内の大学で建築を学んだ後、故郷でハウスメーカーに就職したものの退職しました。義父が厚真町の炭焼き職人の方と親交があり、妻の方が「北の国から」のような生活に憧れていたこともあって、2003年に23歳でゼロから炭焼きの仕事に就きました。

修行は体力・精神力ともに厳しいものがあり、師匠によく怒られましたが、不思議と辞めようとは思いませんでした。師匠の体調不良もあり、2016年、事業を継承し屋号を「かまた木炭」としてスタートしました。

そのような中、2018年9月に胆振東部地震に遭い、炭窯３基が全て崩壊し自宅も壊れ、途方に暮れました。炭焼きを止めれば収入がないですし、伝統の技術が途絶えます。何より自分の炭を待っていてくれるお客様がいましたので、炭焼きの再開を決意。今春までに窯２基を再建し、今では震災前と同程度の生産量に戻りました。

仕事のやりがい

窯出しする時は毎回不安ですが、うまく出来上がっている時は嬉しいですね。

お客様が待っていてくれることが、仕事の原動力になっています。お客様から良い炭だと言ってもらえるとやりがいを感じます。逆に出来が悪かった時も、どこが悪かったのかを言ってもらえるので、次に活かそうと思えます。

【長さを揃えて商品化する】

仕事の大変なところ

炭焼きは窯に一度火が入ったら、朝から夜中まで６時間おきに火の管理をしなくてはならないところが大変です。出荷量が多いので、重労働でもありますね。

木炭を作る過程で一番難しいのは「炭化」です。火が弱すぎてもダメですし、強すぎても炭がボロボロになるので気を遣います。

震災後に、近隣の同業他社の廃業が相次いだことで、取引先を失ったお客様との取引が新たに始まったケースがあります。しかし、原木不足や従業員数の関係から、これ以上生産量を増やすのは、今のところ難しいと考えています。

仕事内容

近隣のミズナラやイタヤカエデを原料に、軟炭と呼ばれる火つきの良い「黒炭（くろずみ）」作っています。

【作り方】

①木 割 り（原木の太さ・長さを一定に切り揃える）
②立て込み（窯の中に木割りした原木を立てて詰める）
③乾　　燥（３日ほど口焚をして生木の水分を抜く）
④炭　　化（４日ほど炎を立てず消えない程度に空気を与えじっくり蒸し焼きにする）
⑤精　　煉（窯の口を開放して一気に窯の温度を上げ火力の強い炭にする）
⑥窯 止 め（通気口を塞ぎ炭が冷えるまで１週間程待つ）
⑦窯 出 し（窯の中が冷えたら木炭を外に出す）

これらの作業を１つの窯で月に２回行っています。

【震災後、再建した炭窯】

胆振の魅力

厚真町は空港や札幌・苫小牧などの大きな街に一時間前後で行けるので利便性が良いです。冬は雪が少ないのでラクですね。そしてやっぱり何を食べてもおいしいところが魅力です。

林業に興味を持っている方へメッセージ

季節や気候によって木の状態が異なり、頻繁に窯を開けられないなど日々条件が異なる一方で、一定の品質が求められるため、炭焼きは経験がものをいう世界です。一朝一夕で習得できる技術ではないので、次の世代に少しずつ引き継ぎたいと思っています。

だからこそ、研修の受け入れや、地域の様々な人との関わりを通じて、多くの人に「炭焼き」という仕事に興味を持ってもらえたら、と願っています。

このページに関するお問い合わせは 胆振総合振興局森林室普及課 まで
電話：０１４４－７２－５１２３　ＦＡＸ：０１４４－７４－０７５４

（２０１９．１１）